

(現代語訳)

「さあ、これからの富士詣の山道は険しくて、乗ってきたお馬は、

富士山を羽織って返りますよー」って、

酒井抱一が俳句に詠んだけど、「富士塚登り」は春の頃、

富士と云えば、江戸の富士は筑波山だね。筑波の嶺の方角に、隅田川を上って行く船は、

芦の繁みにチラッと隠れて見えて、良い風情だよ。

白い帆が川面に影を落とす初夏の頃は、入道雲が立ち登り、昼間の「千生り市」には

サーッと、よく雨が降る。人々はビニ傘求めて右往左往さ。

盂蘭盆会の「草市」を、宵の月が煌々と照らし、

何だか早く「夜の街」に行ってみたくなるよね。あ、コロナで自粛か？

吉原界限は柳の薄暗い木の陰で、露店の「虫売り」が市松模様障子虫籠を置いている。

中は、摘んだ露草に水を撒いてあるのさ。

かすかな虫の音は、鈴虫かな、コオロギかなと、虫の声を聞き分けて、

チンチンと鳴けば、これは「かねたたき」虫と云う具合だし、家々の

かすかな人の声を聞き分けて、戸口でチンチンと鉦をたたいて経文代を乞うのは、

似非坊主の「鉦たたき」と言う具合。

こうやって、吹いてくる風で秋が更けてゆくのが分ってくるのさ。

—虫売りの情景の、三味線だけの演奏が入る—

重陽の節句「菊供養」の頃の、浅草寺の仲店(商店街)の賑わいは格別だ。

どんどん連なっている人波を分けて、ちよつと魅惑の熟女を見つけた！

目立ってるよなあ、色っぽい粋な「挿し櫛」がさあ。

ああ、もう時雨の降る十月かあ。

「べったらし」で賑わう日は、昨日、過ぎちゃったか。

ってことは、たいてい満天の星影となる、「酉の市」の日も近いか。

あれっ、遊郭の閉店時間は夜の十二時だったよね。なぜ其れを「夜十時」って吉原では言うのだろう。女郎衆のお愛想は嘘に決まっているが、時を告げる拍子木までが嘘だっ  
てさっきのエー。

—遊里で流行った、流しの芸人が「新内節」で門付けをする情景を三味線で演奏—

吉原を取り巻く、お歯黒のような真つ黒なドブに照り輝く遊郭の灯も、

一夜が明ければ跡形もなく消え失せ、霜晴れの寒い朝が来る。

熊手ぼうきに引つかかっている落ち葉も、酉の市の熊手に落ちてくる木葉さえも、

今日が十二月の「歳市」で大賑わいだと知らせているのよ。

—「竹巢」という下座歌で、お囃子メロディの三味線演奏—

「竹に菓を食う鶯の気儘らしさの谷渡り梅に止まればホウホケキヨ」

と言う、縁日の小屋で曲芸などの出し物の、軽快なバックミュージック。

おお、境内が雪で埋まってきたぞ。

—「ドンドンドン」と、太鼓リズムの雪の降る様を三味線で演奏—

雪が降り積もって、辺り一面が雪の傘だあ。

令和三年八月三十一日

大中臣正比呂 拙訳

